

らず、中隊長以下全員使役の道路修理にかり出されても、私だけは免除されましたが、だれ一人不満をいう者はありませんでした。

私は中隊長の信任による責任の重大さに思いを致し、部隊本部の信頼にも十分応えてまいりました。

昭和二十一年三月下旬になって内地送還の話が聞かれるようになったころ、起居をともししていた衛生兵と私が風邪で入院することになり、揚子江の可容鎮という港から漢口市の陸軍病院へ入院しました。その間、隊員は一足先に揚子江を下航して南京市へ向かったので身の不運を思わずにはいられませんでした。幸い入院は短期間でその上、運良く下船の時は、漢口より上海まで直行使が利用でき、伝染病が大流行していた南京を通過せずすんだことは幸運でした。

上海には約一か月待機、二十一年六月十三日上海港よりLST船に乗り、六月十五日佐世保入港、伝染病防疫のため十日間沖合に待機のと六月二十五日上陸。翌二十六日佐世保発、六月二十八日無事家族の待つ舞鶴に復員しました。ラバウル行きが変更になったこと、野戦

自動車廠に技術兵として転属したことが私を助けてくれたと思っています。本当に運不運は紙一重でした。

私の半生記

熊本県 松村包雄

早くも歳月は流れて五十余年前のことになった。昭和十三年五月補充兵役であった私にも、ついに来るべきものが来た。同年徴集の現役兵よりも一年遅れの入隊である。当時、私は台北に在住していたので、応召先は台湾歩兵第一連隊補充隊であり、砲銃隊に編入され機関銃の教育を受けた。

同年九月一期の検閲を終えて急遽中支派遣台歩一転属の命令である。九月五日基隆港を出港、中支へ向かった。年老いた両親を残していくことは気がかりなことであったが、逃れようもなく思いを残しつつの船出であった。

九月十七日、台歩一連隊本部に追求して同僚とともに第一機関銃中隊編入となった。我が中隊の陣地は灌木と

竹林混じりの凹地であり、今夜は「至嚴なる警戒のもとに夜を徹し」ということであり、一部は前方陣地の銃側にあつて敵と対峙しているという。

我々は古兵の指導で設営である。天幕張りも簡単そのもの、四隅を灌木か竹に結び付けるだけで、その下に木の葉や草を敷きつめて横臥し仮眠をとるということになる。炊飯は日没後、炊煙が見えなくなつてから少し後方の谷間で行うと教えられた。敵は近きは三〇〇呎、遠いところで五〇〇か六〇〇呎程度のところにトーチカを構えているということであつた。時折り銃弾がヒュンと飛んできた。古兵は弾の音で高いか低いかわかるようになる。今のは高いから心配いらないと、落ち着いたものであつた。

夜明けとともに銃砲声が激しくなり「機関銃前へ」の聲で、私たち新兵の初戦の火蓋は切られた。背負い袋の上には六〇〇発入りの弾薬箱を背負い、片手に円匙を下げて後を追つた。しかし敵はほどなく抵抗を諦めたのか後退したため、弾薬箱が軽くなることはなかつた。

ここは中支揚子江右岸、富池口要塞地帯である。作戦

は遼江作戦、目指すは葉武漢三鎮といわれる要衝で、士氣凛々、大沿鉄山を占領後の追撃戦は、左岸の第六師団と武漢一番乗りを競うようになり、十月二十五日、ついに六師団は漢口に突入し、続いて左岸の我々の各部隊も二十六日武昌に突入、これを占領した。

十二月二十五日、南支転進のため武昌出發、揚子江を下航し広東省黃浦上陸、九江付近の警備。明けて十四年二月九日、海南島上陸戦を敢行したが、幸いここは無血上陸に成功した。熱氣の海南島では新兵として教育訓練に励み、十月末、海南島南端三垂港に集結し次期作戦が開始された。

十月十五日、暴風雨を突いて上陸戦は展開され大発動艇上で死傷者が出る状況の中、無事上陸、小蘆墟付近に駐留して道路構築、補修警戒の任務についた。十二月、南寧方面の戦況急迫し救援のため北上し、同二十五日ごろから中隊でも死傷続出した。聞くところによると当面の敵は新四軍と称し、中国軍中の精銳の共產軍部隊であるといひ。抵抗も強靱である。広島第五師団は南寧付近で包圍され苦戦中のところへ台湾一個旅団が駆けつけた

のである。平地の戦闘は全くない。山から山への山岳戦であった。

私は昭和十五年一月三十一日の攻防のとき、大隊本部から伝令として中隊長へ命令を持って駆けつける途中、左腕に機関銃弾を受け衛生隊に収容された。命令は衛生兵の手を経て中隊長に届けられた。

軍医の診断の結果、「左肘間接骨折貫通銃創」として台湾送還となり七月退院、原隊復帰後、召集解除となり二年五カ月ぶりに我が家に落ち着いた。

職場復帰後二年目、企業台同のために新会社が設立され転出した。六十八歳の父は私に結婚をすすめたが、いつ再召集されるかわからない身を思えば結婚も気が進まない。しかし、たつての頼みには勝てず結婚に踏み切った。二十七歳であった。

十九年五月ついに再召集令がきた。既に二児の父親であった。入隊先は同じ台歩一補充隊砲銃隊であった。結局、台湾で八月十五日を迎え、戦わずして敗戦となり九月一日召集解除、妻子の待つ疎開先の仮住居に復員した。昭和二十一年三月、十三年間の思い出深い台湾の地を後

に郷里熊本に引き揚げた。

沈黙考の末、国有林の払下げを受けて製炭を決意し山深い国有林に入り作業に従事すること四年。長女の入学までには学校の近くへ出ることも叶わず、辛苦の山暮しであった。

その間、老父の急死、第三児の出生等々あったが、昭和二十五年、農協職員に迎えられ辛うじて山暮しを脱出することができた。農協在勤十年の後、スーパーマーケットに迎えられ、店の拡大発展とともに専務としてその責を果たし、昭和五十三年一月病を得て退職、現在に至っている。

湘桂作戦に参加して

愛知県 近藤 光 次

昭和十九年六月三十日歩兵六連隊に召集、七月二日午前二時、軍衣袴、牛蒡剣、雑糞、外被、巻脚袴、地下足袋にて名古屋を出発、下関へ。関釜連絡船ジグザク航行